

# 空から見た君津の山・川・海・まち

## 第1章

## きみつが歩んだ歴史



※デジタル版では左の図からリンク先にジャンプすることができます。

第1章 歴史 …… P.07

第2章 山 …… P.25

第3章 川 …… P.49

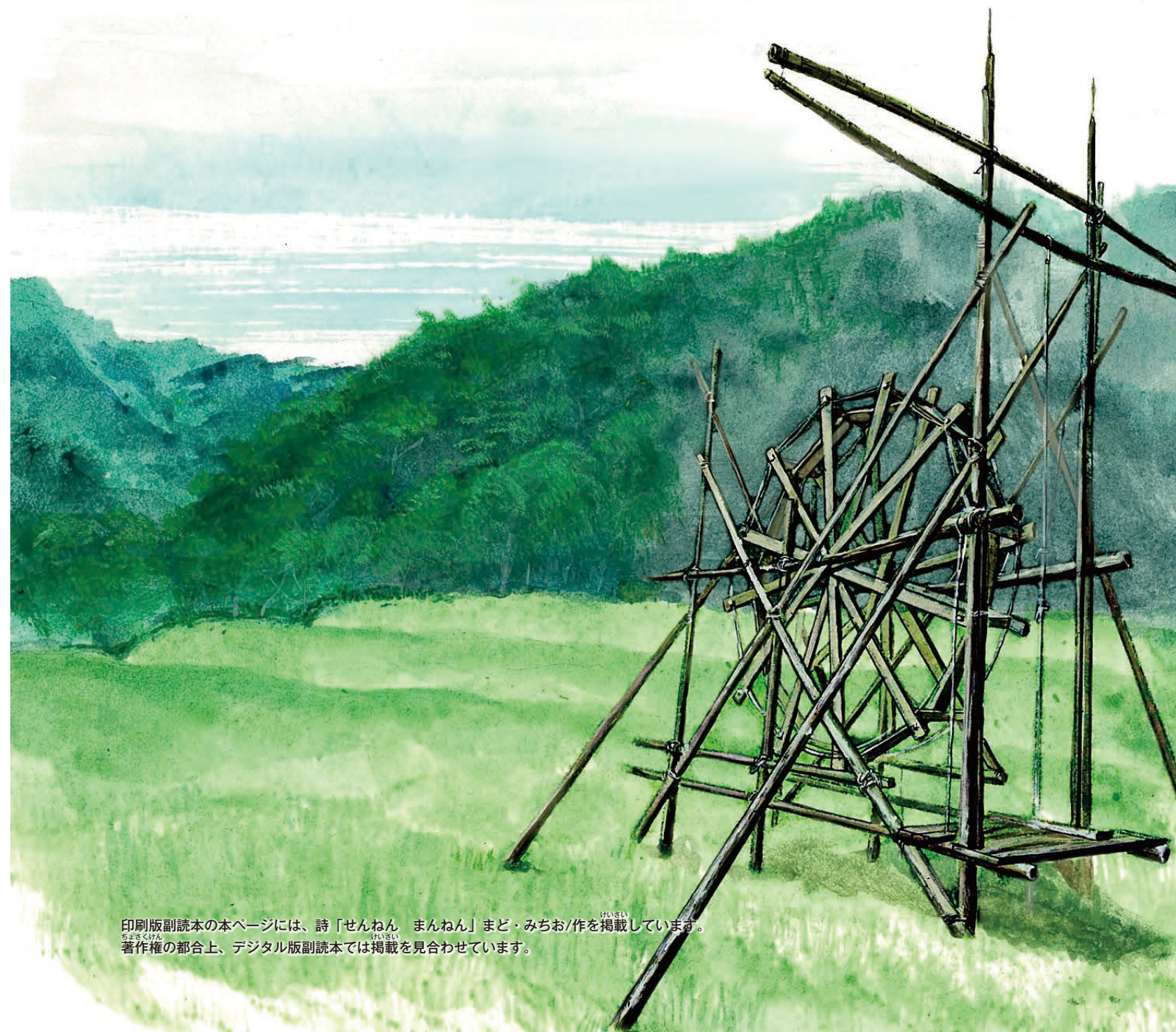
第4章 まち・里 …… P.61

第5章 海 …… P.77



※デジタル版では各ゾーンのくわしい地図や「眺望マーク」から景色の写真を見ることができます。

君津市景観計画（平成30年12月発行）より



印刷版副読本の本ページには、詩「せんねん まんねん」まど・みちお/作を掲載しています。  
著作権の都合上、デジタル版副読本では掲載を見合わせています。



# 君津の大地の成り立ち

## 太古の君津の地層で大発見

太古の昔、君津をはじめ、房総半島（千葉県）の大地の多くは海底にありました。その証拠に、平成15（2003）年、君津市内の市宿層からなんとクジラの化石がまとまって発掘され、大きなニュースになりました。この地層からは、クジラの骨だけでなく、サメの歯やトウキョウホタテなど海の生き物の化石がたくさん出てきました。

現在、クジラの化石の実物は千葉県立中央博物館に展示されています。

### A ギャラクシジラ類

複数のろっ骨がまとまって発見され、千葉県立中央博物館が発掘調査を行ったところ、頭骨や下あごの骨、頸椎、胸椎など、一頭のギャラクシジラ類の骨であることがわかりました。

（推定体長約13m）



## なんでクジラの化石が君津の山にあるの？

化石となって発見されたクジラが生きていたのはおよそ70万年前で、市宿層という地層です。房総半島は、かつて深い海の中にあり、長い年月をかけて砂が堆積（積み重ねること）しました。そして、海底にあった地層はその後、隆起（盛り上がる）して山になっています。この山が、川によってけずられたり、砂を取るためにけずられたりして、眠っていた化石が出てきたのです。

また、市宿層が積もった時代はチバニアン期（77万4千年前～12万9千年前）にあたります。この時代のはじまりを示す地層が千葉県で最もよく観察されることが世界的に認められ、「チバ」の名がつけられています。

地球の歴史  
46億年を  
1年にたとえると、  
チバニアン期は  
12月31日の22時32分から  
23時45分までになるんだって！

### B オニフジツボ

クジラの体の表面につくので、この化石がたくさん見つかったことで、クジラがたくさんいたことがわかりました。

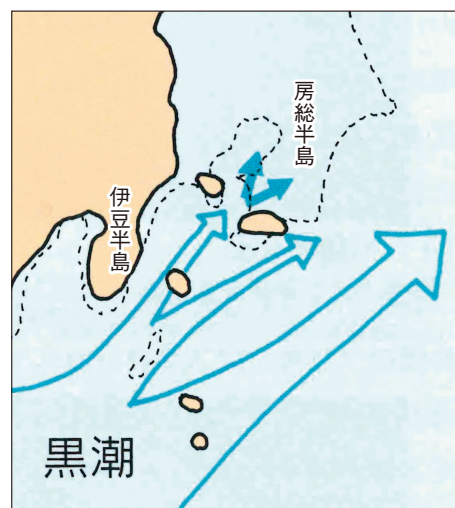


### C ヒラツメガニ

はさみの化石。ギャラクシジラ類の骨の周りから数多く発見されました。海底に横たわったクジラの死がいが、他の生物のえさやすみかとして利用されていたことがわかります。



※A～Cの写真は千葉県立中央博物館提供



市宿層を堆積した流れ  
（君津市自然編より加工して使用）



## 君津の山頂からもさらに古い貝やウニの化石が

ハイキングで人気の高岩山山頂（怒田沢）、三石山山頂（草川原）、寂光不動（旅名）には、およそ200万年前にできた黒滝層という古い地層があり、ここから貝やウニの化石が見つかっています。つまり、海底にたまった地層が、200～300mほど隆起したと考えられます。また、それぞれの場所で、変わった形の貝が見られるのは、とても古い黒滝層がけずられず、残っているためです。高さこそありますが、標高8000mを超えるヒマラヤ山脈の高所から海の生き物の化石が発見されるのも、同じく隆起によってできた山だからです。



▲高岩観音（清和地区）



▲三石山観音寺（亀山地区）

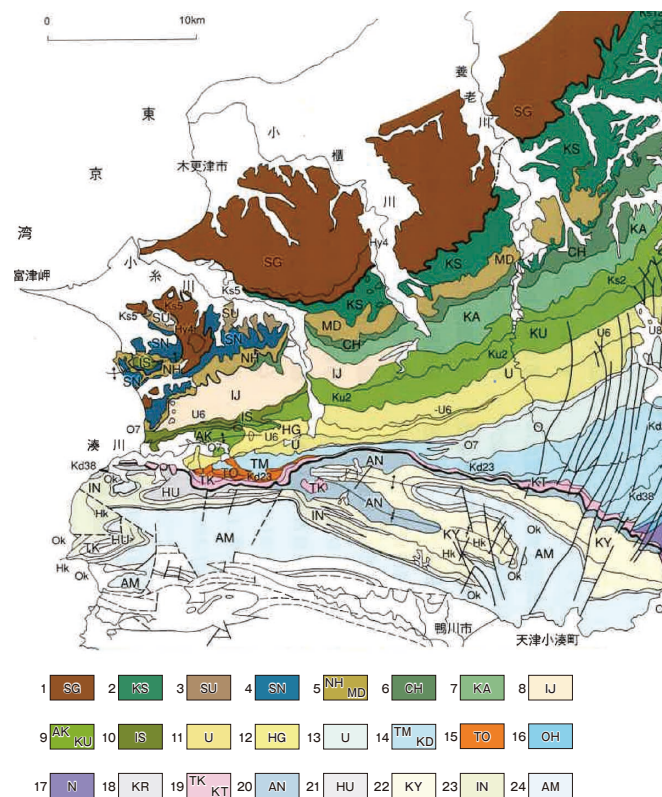


▲寂光不動（清和地区）

注意！  
勝手に地層をけずって岩石・化石をとることは絶対にダメ！  
とっていいのは写真だけ。

## 君津の地層の重なり方

左の地質図と右の地層の重なり表から、自分が住んでいる地域の地層を探してみましょう。



▲房総半島中央部の地質図 三梨・山内(1988) 原図(「千葉県の自然誌 本編 2 千葉県の大地」より転載 千葉県文書館所蔵 (6-県-26))

- 1：下総層群、2：笠森層、3：周南層、4：佐貫層、5：万田野層（MD）および長浜層（NH）、6：長南層、7：柿ノ木台層、8：市宿層、9：国本層（KT）および栗倉層（AK）、10：岩波層、11：梅ヶ瀬層、12：東日笠層、13：大田代層、14：黄和田層（KD）および高溝層（TM）、15：十宮層、16：大原層、17：浪花層、18：勝浦層、19：黒滝層（KT）および竹岡層（TK）、20：安野層、21：秋生層、22：清澄層、23：稲子沢層、24：天津層

この図では上総層群最上部の金剛地層は下総層群に含まれている。

更新世	第四紀	チバニアン期	上総層群	カラブリアン期	ジェシアン期	鮮新世	中新世	三浦層群	木ノ根層
1万年前	完新世								
8万年前									
13万年前									
40万年前									
77万年前									
260万年前									
600万年前									
1400万年前									

▲君津および周辺地域の地層 中嶋・渡辺(2004)、三梨(1990)をもとに作成



# 太古の君津にいた生き物たち

## 君津周辺にいた陸の生き物

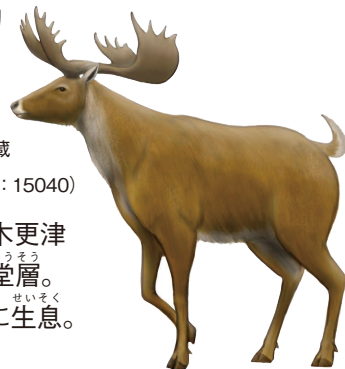
動物園やサファリパークにいそうなゾウなどの大型の動物も君津周辺にいました。氷期になると海面が下がり、大陸と日本列島が陸続きになって、大陸から渡ってきた生き物もいました。

### ●ヤベオオツノジカ



国立科学博物館所蔵  
(標本番号: 15040)

右下あご骨の化石。木更津市畑沢、下総層群地蔵堂層。約40万～1万5千年前に生息。



### ●ニホンムカシジカ



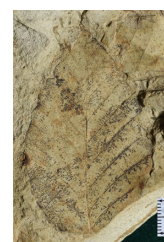
左右の角と頭骨の化石。市原市引田、下総層群木下層。約35万～1万5千年前に生息。



今、君津市にいる大人のニホンジカは角の枝が4つだけど、絶滅したニホンムカシジカは枝が3つなんだって！

### ●植物化石

市原市里見、万田野層。主にブナなどの落葉広葉樹の植物化石が産出。※スケールは1cm



①ブナ



②ミズナラ



③ササの仲間

千葉県立中央博物館発行の『よみがえるチバニアン期の古生物』にたくさんくわしく紹介されています。

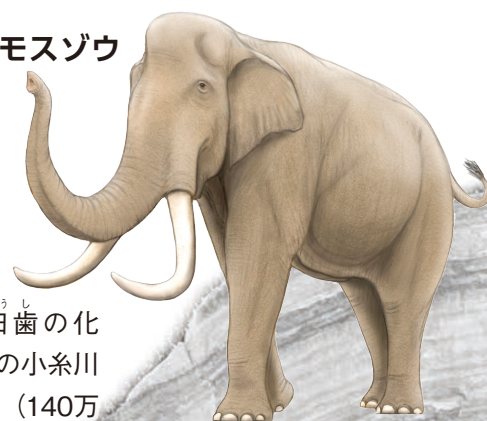


### ●ムカシマンモスゾウ



久留里城址資料館所蔵

下あご骨・臼歯の化石。君津市植畑の小糸川河床の梅ヶ瀬層（140万年前の地層）から明治28（1895）年に発見された。



ムカシマンモスゾウの化石は久留里城址資料館で実物を見られるよ！



## 君津周辺にいた海の生き物

P8で紹介したクジラの他にもこんな生き物たちが見つかっていました。これらの発見で、当時の様子がわかってきました。

### ●ホホジロザメ

歯の化石。君津市市宿、上総層群市宿層。

全長6mにもなる大型のサメ。中央の歯の高さ4.2cm。



### ●マイルカ科

下あごの骨の化石の一部。君津市市宿、上総層群市宿層。



### ●ハンドウイルカ属

下あごの骨の化石。君津市市宿、上総層群市宿層。



群馬県立自然史博物館所蔵  
(撮影: 千葉県立中央博物館)

### ●マンダノセイウチ

雄の頭蓋骨の化石。上総層群長浜層。

右は現生セイウチ（タイハイヨウセイウチ）の頭骨写真。



この見開きページの背景にある影はトウキョウホタテ実物大だよ。

### ●トウキョウホタテ



木更津市畑沢、下総層群上泉層。化石は大量に出ているが、絶滅種。20cmを超える化石も見つかっています。水深が浅かったことがわかります。

### ●イボチヨウガニ



※スケールは1cm

君津市山高原、下総層群地蔵堂層。

### ●キタクシノハクモヒトデ



君津市市宿、上総層群市宿層。

※表記のないものは全て千葉県立中央博物館所蔵・撮影。  
※復元画は全て徳川広和氏制作。

## 化石探しにチャレンジ

栃木県那須塩原市にある「木の葉化石園」では、チバニアン期の石を割って、木の葉の化石を探す体験ができます。運がいいと葉だけでなく、昆虫・魚・カエル・ネズミなども見つかるかも！



君津で見ついているものが、世界のはるか遠い場所でも発見されているんだよ！



## 探究のタネ

- 他にはどんな動物がいたのだろう。
- なぜ絶滅してしまったのだろう。
- 化石ってどうやってできるの。

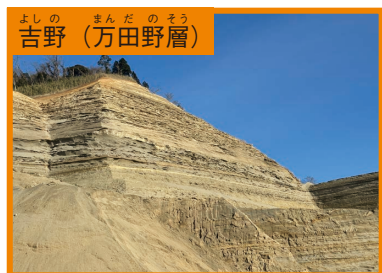


# 君津で見られる地層

## 君津市で見られる主な地層マップ

**注意！**  
私有地へ許可なく入ることはできません。

きみつ  
ムービーバンク  
かめやまこ  
亀山湖の地層  
を見てみよう



地理院地図Vectorを加工して作成

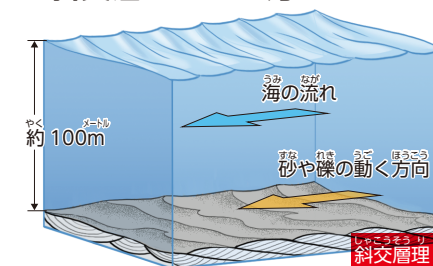


## 不思議な模様の秘密

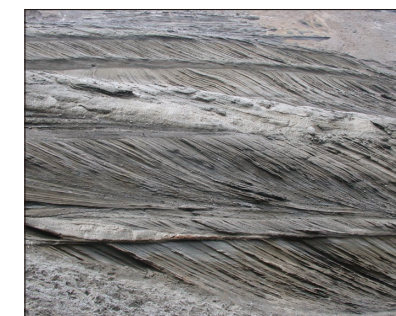
君津市内の道路から見える砂取り場などでは地層の重なり方がよく分かります。よく見ると、写真のように不思議な模様があります。これらは斜交層理 (別名：クロスラミナ) と呼ばれています。強い水の流れて砂が堆積 (積もること) と浸食 (けずられること) をくり返してできた地層です。

※砂取り場へは立入禁止 ※写真提供：千葉県立中央博物館

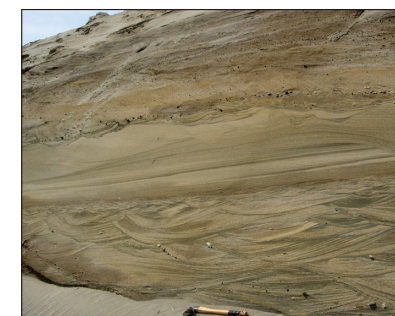
## 斜交層理の作り方



千葉県立中央博物館の展示をもとに作成



市宿層の斜交層理



万田野層の斜交層理

## 君津に地下水が豊富なのはなぜ？

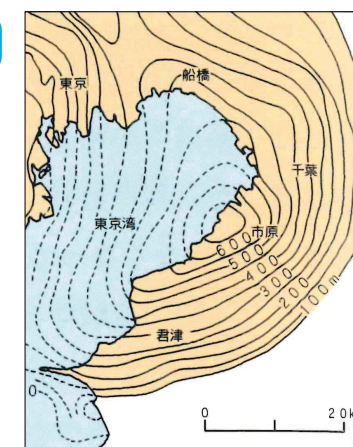
君津市の南東部にある房総丘陵は千葉県で最も雨の多い場所です。その豊かな雨が、川

リンク  
P64「地下水と上総掘り」

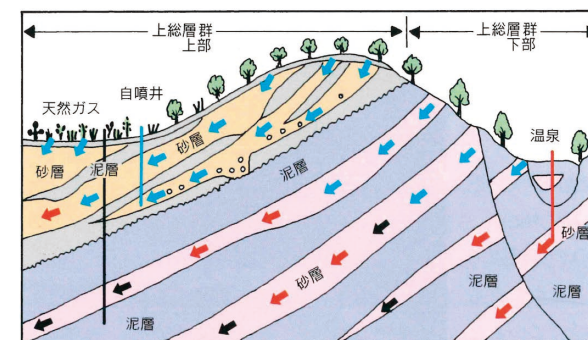
君津市の地層は海の中で重なってできたもので、泥が押し固められた地層 (水を通さない層) と、砂や砂地の地層 (水が流れる・たまる層) が、くり返し重なっています。この重なった状態で、東京湾を底にしてくぼんだ形になっています。寒い時期 (氷期) には、泥がたまり水を通さない層になります。反対に暖かい時期 (間氷期) には、海の砂がたまり、水を通す層ができます。

小糸地区大井の谷津田の上部にある水神谷湧水群から1日約5000tもの水がポコポコ湧いているのは、水を通す層を伝わってきているのです。

また、久留里の自噴井戸の地下水年代は5000年以上前で、縄文時代に降った雨水が湧き出ていると考えられています。



下総垂地下水盆の基底等深線図 (君津市史自然編より)



▲地質環境 君津市域南部の地下水の水の流動のようすを表した模式図 (君津市史自然編より)  
(大地のやさしい使い方、RESEARCH INSTITUTE of ENVIRONMENTAL GEOLOGY, CHIBA)

## 清和の火山灰の地層の秘密

清和県民の森の「鍵層を追いかける」解説板近くには、火山灰の地層があり、白っぽい凝灰岩がポロポロと落ちています。すりつぶすとザラザラとした手ざわりです。これは火山ガラスで、昔の人は精米に使ったり、クレンザーとして使ったりしたそうです。





# 君津市、千葉県の縄文時代ってどんな様子？

1万年以上続いた縄文時代は、縄文土器という厚手で、低温で焼かれた縄目がついた土器を使います。縄文時代の人々は、海や川に近い台地などに竪穴住居を作り、狩りや魚捕り、木の実の採集をして生活していました。ダイズやアズキなどの植物栽培も始まったとされています。石、貝、動物の骨・角で釣り針やアクセサリも作っていました。また、海の近くには、「貝塚」といわれる食べた貝がらや動物などの骨がまとまって見つかる場所があり、当時の暮らしをよく知ることができます。

## 日本一貝塚が多い千葉県

海に囲まれた千葉県は、日本一貝塚が多い都道府県で、全国の約3割の貝塚があります。なかでも千葉市にある加曽利貝塚は、日本最大級の集落型の貝塚で、国の特別史跡に指定されています。君津地区にも多くの貝塚があり、房総半島最南端の大型貝塚である袖ヶ浦市の山野貝塚が国の史跡に指定されています。君津市では、小糸川や小櫃川周辺の台地上に、100カ所以上もの縄文時代の遺跡が見つかり、その中に大きな貝塚である三直貝塚があります。内陸部ではイノシシやシカなどの狩りの山のむらがあり、海のむらと食材を交換することで、千葉の豊かな食によって持続可能な社会をつくりました。

### ● 三直貝塚（八重原地区）

今からおよそ4500～3000年前のものと考えられています。高速道路建設時に行われた発掘調査では、集落や環状盛土と呼ばれる当時の土木工事跡も一緒に見つかります。また、縄文土器や貝で作ったアクセサリ、動物の骨で作った装飾品なども見つかります(P15参照)。発掘調査の後、埋め戻されており、見学することはできません。



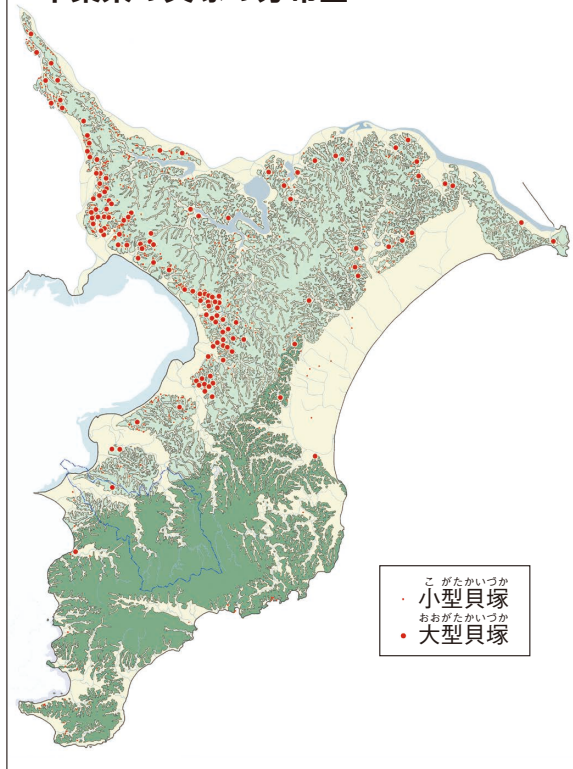
### ● 寺ノ代遺跡（亀山地区）

漁に使う石錘や土錘という道具が、房総半島の中でも他の遺跡に比べてとても多く見つかります。この集落では、小櫃川で魚を捕って生活していたことが想像できます。



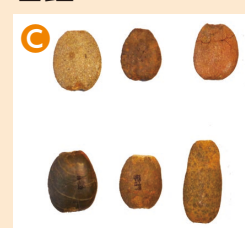
▲ 寺ノ代遺跡の竪穴住居跡

## 千葉県の貝塚の分布図



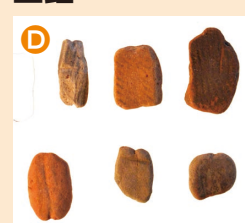
※A～Dの写真は千葉県教育委員会提供

### 石錘



平たい石の両端にくぼみを作り、網や釣り糸を結びつけておもりにしていました。

### 土錘



使い方は石錘と同じです。土器の文様があり、割れた土器の破片をリサイクルしたものです。

君津市の三直貝塚で見つかった出土品から縄文時代の暮らしを想像しよう。



## 貝輪作りに挑戦！

- ① 貝の真ん中を固いもので打ちかき、穴をあける。
  - ② ふちをやすりなどでけずる。
- 大きさがちょうどよく、かたくて割れにくいベンケイガイをはじめ、サルボウガイ、アカガイ、アカシガイなどが貝輪に使われていました。



## もったいない！

### イボキサゴの出汁で縄文スープ

貝塚で見つかる貝の種類は何が多いと思いますか？ アサリやハマグリなど現代人が好む貝もありますが、実はイボキサゴという小さな巻貝が8割以上を占めています。縄文人はこれをスープの出汁として、イノシシなど獣の肉やどんぐりなど木の実を煮るのに使っていたのではないかと、という説があります。イボキサゴは減ってしまった時期もあったようですが、ここ数年また増えて、東京湾のノリ・アサリ漁師にとって漁の邪魔となってしまうとされています。小さすぎて食べることが難しく、やむを得ず大量に処分されています。自然の恵みを無駄にしないためにも、縄文人の知恵を借りて、抽出したイボキサゴの出汁を、令和6年2月に君津市内の小中学校の給食メニューに取り入れました。未利用貝だったイボキサゴを活用した学校給食は、日本初、そしておそらく世界初の試みです。タウリンなどの滋養強壮成分が豊富に含まれているそうです。



▲江戸時代にはおはじき遊びに使われていたイボキサゴ

## 火はどうやって？

縄文時代には「錐もみ式」で火をおこしていました。後に、「弓ぎり式」や「舞ぎり式」も登場します。



## ミニチュア土器

縄文時代～古墳時代の遺跡からは日常生活には使いにくい、手のひらサイズの土器が見つかることがあります。何のためにこれらが作られたのか、まだよく分かっていません。みなさんと想像してみてください。



## 探究のタネ

- 色々な火おこし法を試したい。
- 貝輪、勾玉、鹿角アクセサリを作りたい。

NHK  
アーカイブス

千葉・縄文の  
味を現代へ





# 君津でも稲作が始まった弥生時代

今から約2400年前の弥生時代に、大陸から米作りが伝わったと考えられています。米作りの技術は、西日本から東日本へと広がっていきます。

君津市では、小糸川の近くで常代遺跡や鹿島台遺跡のような大規模な遺跡が見つっています。弥生時代の人々は、米作りがしやすい水辺の近くなどに住みます。常代遺跡からは、約2100年前の木製農具や水を引くための堰跡が発見され、米作りをしていたことがわかりました。

## ●常代遺跡(貞元地区、周南地区)

縄文時代から江戸時代にかけて作られた土器や木製品などが数多く見つかりました。

特に、千葉県の弥生時代を代表する遺跡として有名で、「方形周溝墓」というお墓が160基以上も見つかりました。

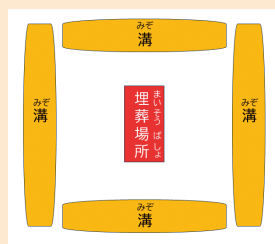
大きな溝からは、木で作られた農具などが500点以上出土し、非常に貴重なものとして千葉県の有形文化財に指定されています。

炭化米や、2000年前のイネ科の植物花粉も出土しています。



▲おにぎり状の炭化米

「方形周溝墓」は、弥生時代のお墓で、四角い溝を周りに掘り、中央に亡くなった人を埋葬します。



## ●鹿島台遺跡(周南地区)(旧石器時代～奈良・平安時代)

弥生時代の遺跡部分からは、多くの方形周溝墓や環濠と呼ばれるV字状の溝が見つかりました。環濠は幅約4m、深さ約2mで台地の上をめぐるということがわかっています。なぜこのように深い溝を作ったのか、ぜひ想像してみてください。



▲環濠の発掘調査風景



▲出土した弥生土器

## ●どのように使ったか想像してみましょう



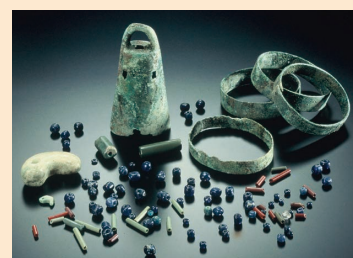
▲常代遺跡出土の木製品

県指定有形文化財(考古資料)



▲常代遺跡発掘調査風景

## 大井戸八木遺跡(小糸地区)の出土品



▲ガラス製の小玉、石製の勾玉や管玉、小銅鐸

市指定文化財(考古資料)

# 巨大なお墓ができた古墳時代

3世紀になると土を盛って、王や豪族などのお墓である古墳が造られます。この時代を古墳時代といいます。古墳は、造られた時期や埋葬される人の地位などによって大きさや形が異なります。日本で最も大きい大仙古墳(仁徳天皇陵)は墳丘の全長が486mの前方後円墳です。

## 君津市周辺の古墳と横穴墓

千葉県最大の内裏塚古墳①(富津市二間塚)や、金の鈴が出土した金鈴塚古墳②(木更津市長須賀)が特に有名ですが、君津市にも多くの古墳があります。

4世紀代には、小櫃川流域に、飯籠塚古墳(全長102m)・浅間神社古墳(全長103m)・白山神社古墳③(全長89m)の「小櫃の三大古墳」と呼ばれる全長100m級の前方後円墳が造られます。また、同じ時期に小糸川流域では、千葉県内最大級の前方後方墳である道祖神裏古墳④(八重原地区、全長56m)が造られます。これらの古墳は、地域の豪族の墓と考えられます。

6世紀代には、小糸川・小櫃川流域ともに多くの古墳が造られます。小櫃川流域では、100基を超える古墳が造られた戸崎古墳群があります。小糸川流域では、前方後円墳である八幡神社古墳(外箕輪地区、全長77m)や、小さな山の斜面に横穴を掘って作られた小山野横穴墓群⑤(周南地区)や市宿横穴墓群(清和地区)が造られます。

### ①内裏塚古墳 ※国指定史跡

千葉県最大の古墳(全長144m)。埋葬されているのは、小糸川流域を治めていた周淮国造と考えられています。

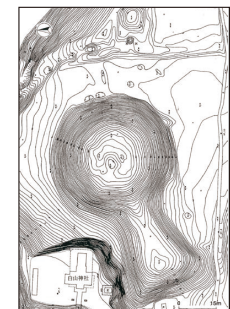
### ②金鈴塚古墳 ※県指定史跡

全長95m。埋葬されているのは、小櫃川流域を治めていた馬来田国造と考えられています。

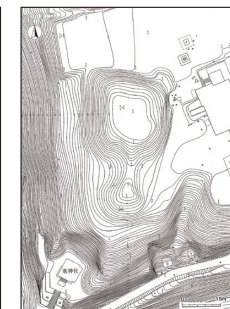


▲出土した金鈴  
(木更津市郷土博物館金のすず提供)

### ③白山神社古墳 ※県指定史跡



### ④道祖神裏古墳 ※県指定史跡

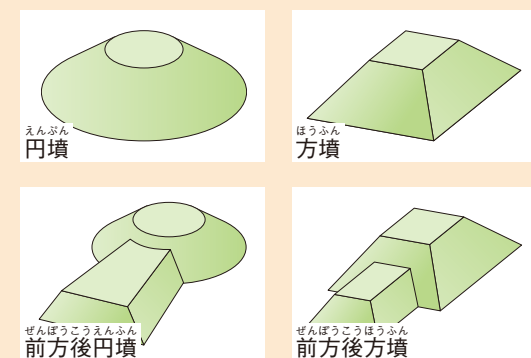


### ⑤小山野横穴墓群 ※市指定文化財(史跡)



▲君津市周辺の紹介した古墳・横穴墓の位置  
(地理院地図Vectorを加工して作成)

## 古墳の種類



## 須恵器

古墳時代に朝鮮半島から作り方が伝わった土器です。ろくろで成形し、登り窯を用いて高温で焼き上げます。小糸川流域は、須恵(周淮)の国と呼ばれたことから、何か関係があったかも知れません。周淮は周東、周西、周南という地域名につながっています。



▲戸崎47号墳出土の須恵器



小櫃川流域博物館  
白山神社古墳



# 奈良時代～平安時代

7世紀中ごろ以降、日本列島に仏教文化が広がり、古墳を造らなくなります。政治的な地域の整備も進み、君津市域は上総国となり、郡の役所ができ、郡を治める律令制度（法律で国を治める制度）がとられていました。小糸川流域は周准郡、小櫃川流域は畔蒜郡となりました。郡の役所の位置は、君津市郡地区に周准郡が、木更津市下郡地区に畔蒜郡があったと考えられています。

8世紀以降の平安時代になると、有力者などが土地を自分で所有するようになり、律令制度がくずれていきます。

12世紀代には、さらに開発が進み、律令制の郡域が東西や南北に分かれていき、地名に東西南北がつけられることが多くありました。この時代に、周准郡も「周東郡」「周西郡」の東西2つに分かれたのです。

## ●九十九坊廃寺跡（八重原地区）

7世紀の終わりに造られた周准郡の郡寺とされ、「九十九坊」の名は、たくさん建つ建物やお堂が立ちならんでいたという伝説にちなんでつけられています。推定の高さ20mの三重の塔や講堂、門などの建物があつたことがわかっています。周辺では、多くの瓦が見つかります。

また、八重原公民館の下には、九十九坊廃寺と関係がある南子安金井崎遺跡があり、竪穴住居跡や建物跡が見つかりました。奈良時代から平安時代にかけて、八重原地区がとてにぎわっていたことが想像できます。



▲安房・上総・下総各郡の位置図  
（『千葉県歴史』より）



▲九十九坊廃寺跡発掘調査  
（2024年）

## ●上湯江遺跡（貞元地区）

住居跡や井戸に加え、絵や文字が墨で書かれた土器（墨書土器）や書道で使う水差し（水滴）も見つかり、文字を書ける人がいたことがわかりました。



▲上湯江遺跡発掘の様子



▲水差し（水滴）



▲墨書土器

## ●富吉遺跡（貞元地区）

多くの建物跡は、平安時代の終わりから室町時代にかけて、小糸川を利用して運んでいた物の倉庫として使われていたと考えられています。

リンク  
P54「小糸川・小櫃川の河岸」

# 鎌倉時代～戦国時代

房総は、源頼朝が鎌倉幕府を開く前に再起をはかった重要な場所です。戦に敗れて房総に逃れてきた頼朝を、この地の勢力であった上総氏・千葉氏などが支えました。鎌倉幕府が開かれた後、房総は頼朝が奇跡の復活をとげた場所として、多くの頼朝伝説が生まれ、君津にも様々な逸話や通過時の伝承が残されています。

鎌倉時代～室町時代にかけて、君津の地には、鎌倉の寺社領（寺や神社の所有地）が多く設定され、特に小櫃川上流域の亀山地区は鎌倉の円覚寺の寺領となりました。永和元（1375）年には亀山の材木が、火災で焼けてしまった円覚寺の再建の

ために使われるなど重要な役割を果たしました。多くの武将が勢力争いをしていた戦国時代、安房から上総に勢力を伸ばしたのが里見氏で、久留里城を本拠地とし、周辺を治めます。君津を含む西上総は、湾岸部から内陸部に向け、里見氏と小田原北条氏とのせめぎ合いが続いていました。

## 君津に残る頼朝の話 <塞神社と白旗橋（八重原地区）>

塞神社では、道祖神として、道行く人を災いから守る神様をおまつりして、源頼朝が戦に向かう際に、戦勝祈願したと伝えられています。源氏の白い旗をかかげて通過したと伝えられる山の尾根道だった場所は、旧地名を白旗台と言い、昭和時代に県道を通すために切り通しとなりました。そこにつけられた橋は、言い伝えにちなんで、白旗橋と名付けられました。君津市民文化ホールに続く県道を通る時には、ぜひ上を見上げて、頼朝のことを想像してみてください。他に久留里神社（久留里地区）、八雲神社（八重原地区）、人見神社（周西地区）にも頼朝の伝承が残されています。

リンク  
P73「三島の棒術」

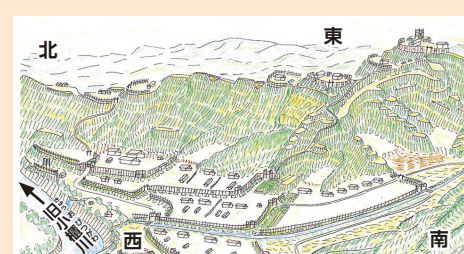


▲塞神社の鳥居



▲白旗橋の下から

## 里見氏 VS 北条氏



▲戦国時代の久留里城想像図

里見義堯は、久留里城を巨大な山城として整備しましたが、永禄3（1560）年、城が北条氏に包囲されてしまいます。籠城（城の中にたてこもり敵を防ぐこと）は数か月も続き、落城の危機となります。

しかし、里見氏に幸運がもたらされます。里見氏に味方する越後（現在の新潟県）の上杉謙信が関東に出陣してきたのです。北条氏は上杉氏に対応するため、久留里に送った兵を引かざるを得ませんでした。こうして久留里城は落城の危機を脱しました。永禄10（1567）年8月の三船山（三舟山）合戦では、里見氏が北条氏に勝利し、上総の大半を手に入れ、下総の一部にまで勢力を伸ばすことになりました。



▲里見氏に味方した秋元氏がいた秋元城（小糸城）想像図

## 上湯江遺跡で銅の古銭を発見！

令和2（2020）年度の発掘調査で、安土桃山時代（戦国時代）の古銭が1100枚以上発見されました。宋（現在の中国）から船で日本に運ばれてきた中国銭です。



▲見つかった古銭

B.C. 3000  
B.C. 1000  
原  
始  
A.D. 1  
100  
200  
300  
400  
500  
600  
700  
800  
900  
1000  
1100  
1200  
1300  
1400  
1500  
1600  
1700  
1800  
1900  
2000  
古  
代  
中  
世  
近  
世  
近  
代  
現  
代



# 江戸時代

江戸時代の君津には180をこえる村々があり、様々な領主によって支配されていました。小櫃川流域には、大名（殿様）の領地（久留里藩領、前橋・川越藩領）の村々がありました。小糸川流域には、幕府が直接治める領地や、旗本の領地の村々が入り組んでいました。大名は1万石以上の領地を江戸幕府から給料として与えられた藩主で、旗本は1万石未満。大名も旗本も、将軍と直接会える権利を持つ、位の高い人たちです。また、鹿野山の神野寺のように、徳川の歴代将軍から領地を認められた格式の高いお寺もいくつかありました。

## 江戸時代の久留里城（別名：雨城）

徳川家康によって江戸幕府が開かれたころ、久留里城には、幕府に仕える大名である土屋氏が2万石で入っており、3代78年にわたって久留里の地を治めました。土屋氏は3代藩主土屋頼直のとき、幕府からおとがめを受け領地を没収されてしまいました。その後、久留里城は約60年間、廃城となりますが、江戸時代の中ごろから黒田氏が久留里藩主となって城を再整備しました。黒田氏の支配は9代約130年間続き、明治維新を迎えました。



▲上総小学校の校門にある久留里城のしゃちほこ



君津市ムービーバンク

久留里城



チバテレ公式

『ちば見聞録』  
「千葉の城下町～久留里～」

## 徳川将軍の側近：新井白石（1657-1725）

江戸時代の政治家・学者として知られる新井白石（通称：与五郎）は、父の新井正清が久留里藩2代藩主の土屋利直に仕えていた関係で、久留里藩とゆかりがあります。

白石は小さいころから土屋利直に可愛がられ、青年期には何度か久留里の地を訪れています。白石が21歳のとき、土屋家のお家騒動がもとで久留里藩を追放されますが、その後、のちに徳川6代将軍となる家宣の学問の師となります。そして、徳川6代将軍家宣、7代将軍家継を支える重要な政治家として活躍するまでになります。白石が行った政治改革は「正徳の治」と呼ばれます。

白石の久留里時代についても書かれている自叙伝『折たく柴の記』は、文学的にも高く評価されています。



▲新井白石の銅像（久留里城址資料館前）

### 武士が内職して作った?! 久留里の楊枝作り

久留里の楊枝作りは武士の内職から始まったという説があります。今から100年ほど前からは、色々な模様の「かざり楊枝」が作られています。

リンク  
P38「雨城楊枝」

### 久留里鎌と上総唐箕

江戸時代に君津で発明された農業の道具で、日本の広い範囲で売られたベストセラー商品でした。

リンク  
P65「久留里鎌と上総唐箕」

### 新井白石と久留里の町医者、伴幽庵の交流

伴幽庵は、白石の久留里時代からの友人で、将軍のもとで活動している白石に、自然薯（山芋）を送りました。

白石が伴幽庵にあてて書いたお礼の書簡が残されています。  
※君津市指定文化財「新井白石書簡」

## 山・川・海を通じて江戸へ運ばれた物資

右の絵には木更津船と呼ばれる五大力船が停泊している様子が描かれています。君津の山で生産されたものなどを小糸川や小櫃川で運び、この木更津船に積みかえ、東京湾を渡って江戸まで運びました。また、右の歌川広重の絵の下の方に描かれているものは何でしょうか。P23をヒントに考えてみましょう。

リンク  
P36「炭焼き半兵衛」  
P54「君津の河岸と街道」



▲歌川広重「不二三十六景 上総木更津海上」  
（木更津市郷土博物館のすず提供）

### 久留里道（参勤交代道）

久留里の城下街からは東京湾や安房、東上総など四方に道がのび、昔から交通の重要な場所でした。久留里から江戸に行くには3つのルート「東往還」「中往還」「西往還」があり、いずれも「久留里道」と呼ばれていました。中でも「中往還」は「殿様道」と呼ばれ、久留里城主の参勤交代に使われていました。この道は国道410号（現在一部市道）となり、通称「久留里街道」と言われています。小櫃地区三田の道沿いにある「地藏尊道標銘」（1805年）や、俵田駅近くの「江戸道道標」（1665年）には、江戸の方向や距離が示されています。



▲上総小学校では総合の時間に甲冑作りを体験。10月下旬久留里城まつりの武者行列で久留里城下町をねり歩く。（写真は2024年）



▲出陣式での上総小甲冑隊による堂々とした剣舞

## 海と芸術 波の伊八→葛飾北斎→西洋の画家

江戸時代、浮世絵師の葛飾北斎は西洋のゴッホ、セザンヌ、ピカソなどの印象派の画家たちに大きな影響を与えたと言われています。その葛飾北斎に影響を与えたと考えられてきた宮彫刻師が千葉県「波の伊八」こと、武志伊八郎信由です。

「波を彫らせたら天下」と称えられた波の表現は抜群で、関西の職人たちに「伊八のいる関東に行ったら波を彫るな」と言わしめるほどでした。生まれ故郷の鴨川では、馬に乗って海に入り、くずれる横波を近くで観察していたと言われています。

葛飾北斎は文化3（1806）年に房総半島を旅しますが、その時に千葉県各地のお寺にあった伊八の彫刻を目にしていたのではないかと考えられています。

君津市内にも、伊八の作品が多く残されていますが、所有者の調査によって近年発見されたものもあります。その発見によって、今まで分からなかった伊八の若いころの活動の様子が、よりくわしく分かってきました。最新の研究では、伊八と葛飾北斎がそれぞれ別の芸術家から影響を受けたのでは、という説もあります。



▲波の伊八「波に宝珠」（行元寺）[いすみ市]（上）  
と葛飾北斎「神奈川沖浪裏」（下）



▲波の伊八「波に兎」（宝性寺）[君津市 清和地区]

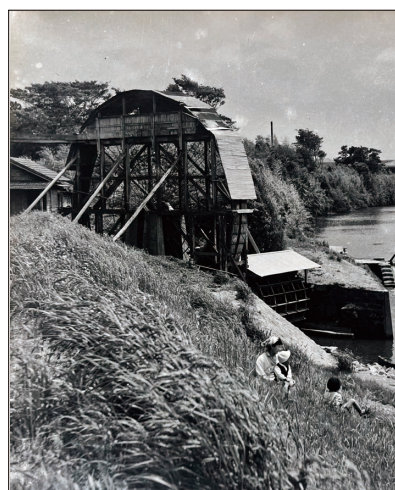


# 明治・大正・昭和前期

水を低いところから高いところへ送る揚水施設がなかったころは、農業はめぐみの雨にたよるしかありませんでした。雨が降らない年は、米が収穫できず、人々は苦しみました。

明治28（1895）年、久保・坂田・空師の3地区は、久保揚水車を設置し（現在の富久橋付近）、田んぼに小糸川の水を送ることに成功しました。おかげで、田んぼの面積も大幅に増やすことができました。小糸川下流には、他にも多くの揚水車があり、川の流る力（水力）を上手に利用していたのです。

一方、留場という設備が川舟の運行のじゃまになるため、争いもありましたが、話し合ってルールを決めていました。久保揚水車は、昭和38（1963）年に電力揚水機に切りかわるまで、久保普通水利組合が管理していました。



▲昭和34(1959)年の久保揚水車  
(久保自治会蔵)

## ●東京湾海堡(富津市)

明治から大正にかけて、首都の東京を守るために東京湾の富津岬と横須賀市の海がせまくなっている部分に第一、第二、第三の3つの海堡が建設されました。海堡とは、砲台を設置するために造られた人工島です。

このうち、第三海堡は、当時の世界最先端の建設技術で造られていたため、その後の日本の海洋・港湾建設技術の基礎となりました。アメリカ陸軍が参考にするために資料提供を求めたほどでした。第三海堡は、完成から2年後に発生した関東大震災の影響で海にしずみ、船の安全航行の障害となっていたことから、平成19（2007）年度までに撤去されました。第二海堡へは、上陸ツアーが実施されています。

## ●関東大震災 大正12(1923)年9月1日

人見地区では土砂くずれが起きて小糸川の水をせき止めたという記録が残されています。

リンク  
P91「富津干潟の藻場」



▲3つの海堡の位置



▲第二海堡上空写真  
(国土交通省関東地方整備局東京湾口航路事務所提供)



リンク  
P29「森林の役割」

## 君津の戦争の記憶～八重原工場と小山野地下工場～

首都防衛のため、君津は地理的に重要な位置にありました。昭和16（1941）年10月に、国内最大規模の軍用機修理工場である第二海軍航空廠が木更津市岩根に作られました。同年12月、太平洋戦争が開戦すると、工場拡大のために分工場が必要となります。岩根に近いこと、鉄道に近いこと、広い土地があることから、周西駅（現・君津駅）周辺の八重原村・周西村に分工場用地が決められました。現君津中学校の場所は、海軍航空廠事務所の跡地です。その後、戦況が悪化したことにより、小山野（周南地区）にはトンネルがはりめぐらされ、多くの女学生が動員された地下工場もできました。工場建設に携わる人々で人口が急増し、複雑になった役場の事務を効率化することが求められました。そこで、昭和18（1943）年4月1日に八重原村・周西村が合併し、（第一次）君津町ができました。

※『戦時体験からみた君津』（八重原公民館）参考

## 君津の海の大きな決断その1 ～ノリ養殖を始める～（江戸・明治・大正・昭和～）

右の写真A B Cは、かつての君津のノリ養殖に関する道具です。どのように使うか想像してみましょう。

リンク  
P31「三舟山マテバシ」  
P80「ノリ養殖」



## ●何度断られてもあきらめない近江屋甚兵衛(1766-1844)

上のAは木や竹をたばねて海にさしてノリを成長させる「ノリひび」、Bはノリを手で収穫するときに使う「ノリげた」、Cはノリを細かくする「飛行機包丁」です。

江戸時代、君津でノリの養殖が始まるまで東京湾では、多摩川河口付近の品川や大森で行われていました。江戸でノリ問屋を営んでいた近江屋甚兵衛は、ノリ養殖にふさわしい場所を見つけて、いつか自分でノリを作りたいという夢を持つようになりました。

そのため、甚兵衛は①江戸川河口（現：市川市）、②養老川河口（現：市原市）、③小櫃川河口（現：木更津市）の村々で、村人たちにノリ養殖を一緒にしないかと誘いました。しかし、それまで魚や貝の漁をしていた村人たちは「もともととれていた魚がとれなくなってしまうのでは」と不安に思い、断られてしまいました。

がっかりして江戸にもどった甚兵衛ですが、あきらめきれず、今度は④小糸川河口（現：君津市）にある人見村にやってきました。これまでに3か所で断られていた甚兵衛でしたが、人見村の名主八郎衛門と村人数人は文政4（1821）年にノリ養殖に協力する決断をしました。最初はうまくいかず失敗しましたが、翌年（文政5（1822）年）の冬、木ひびに黒々としたノリがつかしました。千葉県で初めてノリ養殖に成功したのが現在の君津市だったのです。

ここで始まったノリ養殖は次第に周辺の村々へ広がっていきました。君津市周辺で生産されたノリは「上総ノリ」として大変人気となっていきました。



▲大正時代のノリはがしとごもり(人見地区)



▲近江屋甚兵衛の石像  
(青蓮寺【人見地区】)

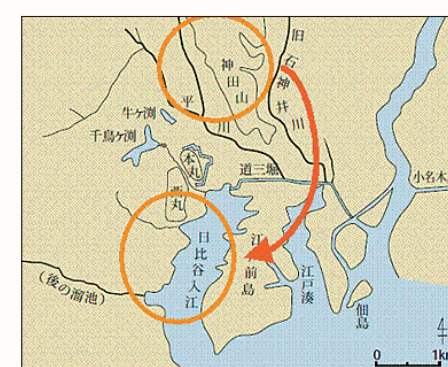


▲甚兵衛が交渉した河口

## 豆知識

### 日比谷の地名の秘密

東京は昔、江戸城（現在の皇居）あたりに海岸線があり、日比谷は海水が入りこむ入り江（浅瀬）でした。ノリの栽培で竹ひびや木ひびがたくさん建てられていたことに由来する地名だと考えられています。江戸時代に、神田山をくずして、埋め立てられました。



国土交通省関東地方整備局東京港湾事務所HPより

富津市YouTube  
富津の海苔養殖



昭和34年  
すべての作業は  
手仕事だった



# 君津の工業化(昭和時代後期～)

## 君津の海の大きな決断その2 ～漁業権譲渡～

君津市の海岸地域はおよそ4kmにわたって遠浅な浜辺が続き、春から秋にかけては貝や魚がたくさんとれ、秋には冬のノリ収穫に向けて一面にノリひびが建てられていました。

江戸時代の近江屋甚兵衛の決断から始まった千葉県千葉県のノリ養殖は、やがて一大産業となり、1940年ころには生産額全国1位になるほどまでに成長しました。

しかし、高度経済成長期の昭和30(1960)年代に鉄の需要が高まったこともあり、君津の海は東京湾を埋め立てて工場を建てる場所選ばれました。海で仕事をしていた人たちは、自分たちの生活が変わってしまうため大変な決断でしたが、未来の君津の発展のために漁業権を譲り渡すことに同意しました。こうして、千葉県の東京湾側に広まったノリ養殖は、発祥の地である君津市からなくなってしまいました。

昭和40年代、奈良輪地先(現：袖ヶ浦市)で、特に成長が優れた養殖品種「ナラウスサビノリ」が発見され、全国に広まりました。江戸時代の東京湾では「アサクサノリ」が主流だったと考えられていますが、現在、日本で養殖されているノリの品種のほとんどは「ナラウスサビノリ」です。となりの木更津市や富津市などでは、令和になった今も全国的に品質の高いノリを生産し続けています。

のり ぞうしんこうかい  
海苔増殖振興会



のり まめずかん  
海苔の豆図鑑

## 漁業のまちから工業のまちへ

### ●八幡製鉄(その後:新日本製鉄、現:日本製鉄)の進出

漁業権譲渡後、君津の海は埋め立てられ、1965年開業の八幡製鉄君津製鉄所(現：日本製鉄東日本製鉄所君津地区)をはじめとして多くの工場が建ちなりました。また、工場に勤めるために多くの人々が家族と一緒に君津へ移り住み、団地が建てられ、それに伴って新しい小学校(大和田小学校〔1968年〕、周西中学校〔1968年〕、坂田小学校〔1971年〕、南子安小学校〔1975年〕)が次々に開校しました。特に、八幡製鉄所があった北九州市から君津市に2万人以上が移住した状況は、「民族大移動」とも呼ばれるほどでした。当時の学校の教室では九州の言葉がとびかたり、とんこつラーメンなどの食文化も伝わったりしました。

急速に人口が増え、地域開発が進んだ君津町は、昭和45(1970)年に小糸町・清和村・上総町・小櫃村と合併して君津町となり、昭和46(1971)年に君津市が誕生しました。

### すさい・まちの変化 『100の記憶』



製鉄所が進出した旧周西村にある周西公民館が当時を知る約100人にインタビューした記録。



▲1960年千葉県海岸調査 小糸川河口付近

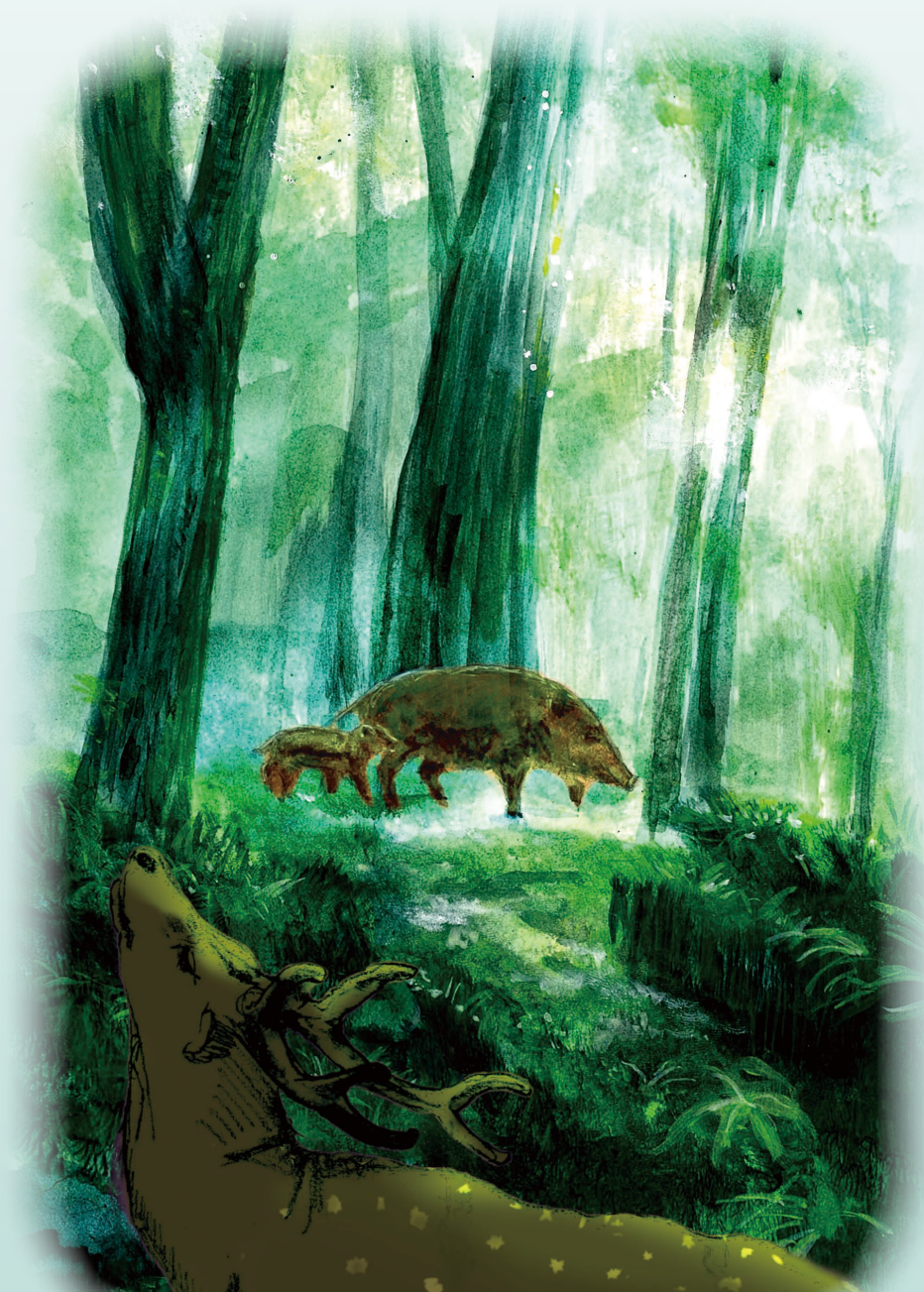


▲日本製鉄提供 (2010年撮影)



P56「工業用水をためるダム」  
P78「東京湾の干潟の減少」

# 第2章 豊かな山



印刷版副読本の本ページには、詩「木」田村 隆一/作を掲載しています。  
著作権の都合上、デジタル版副読本では掲載を見合わせています。